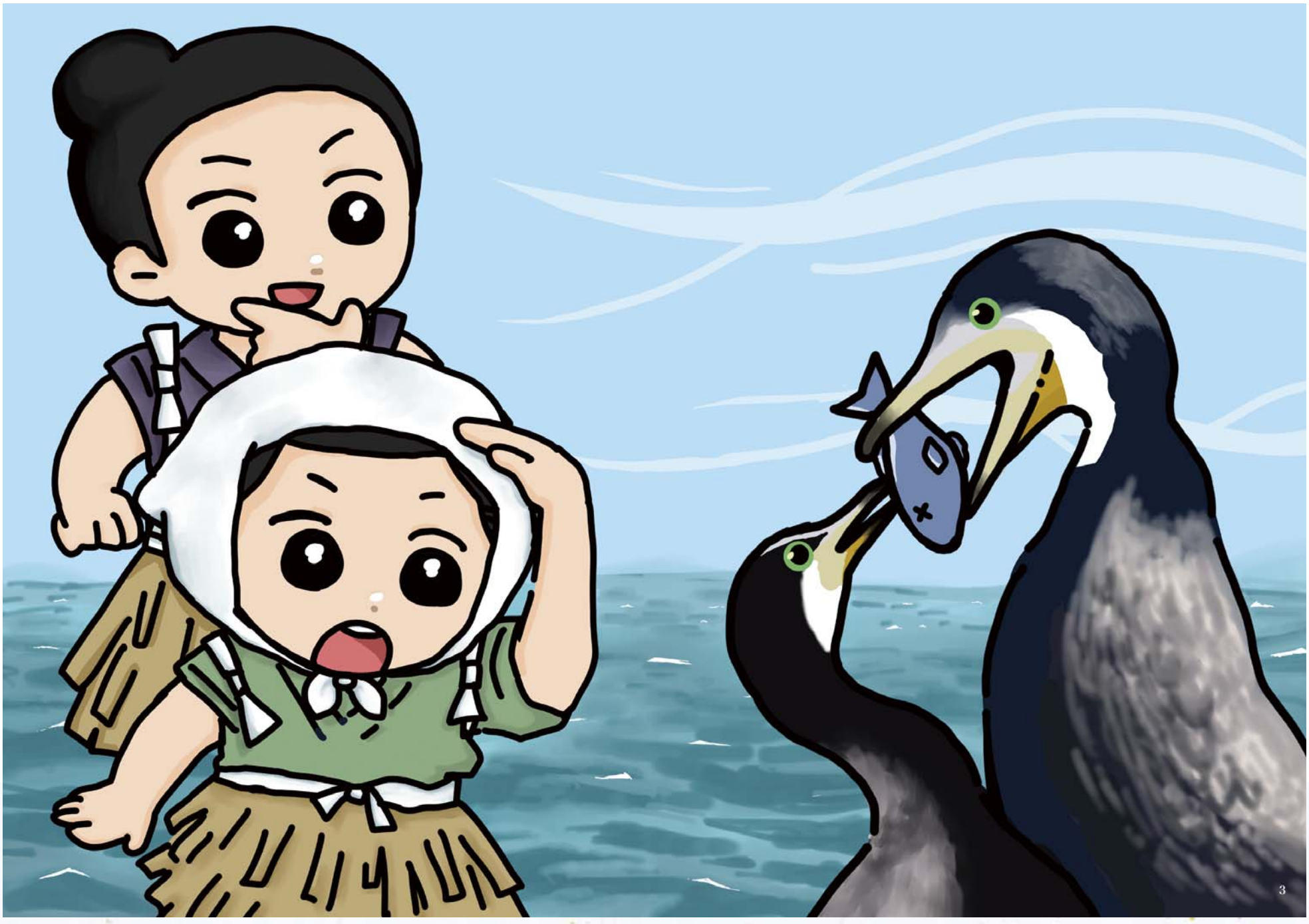
日本昔ばなし「鵜様のおはなし」

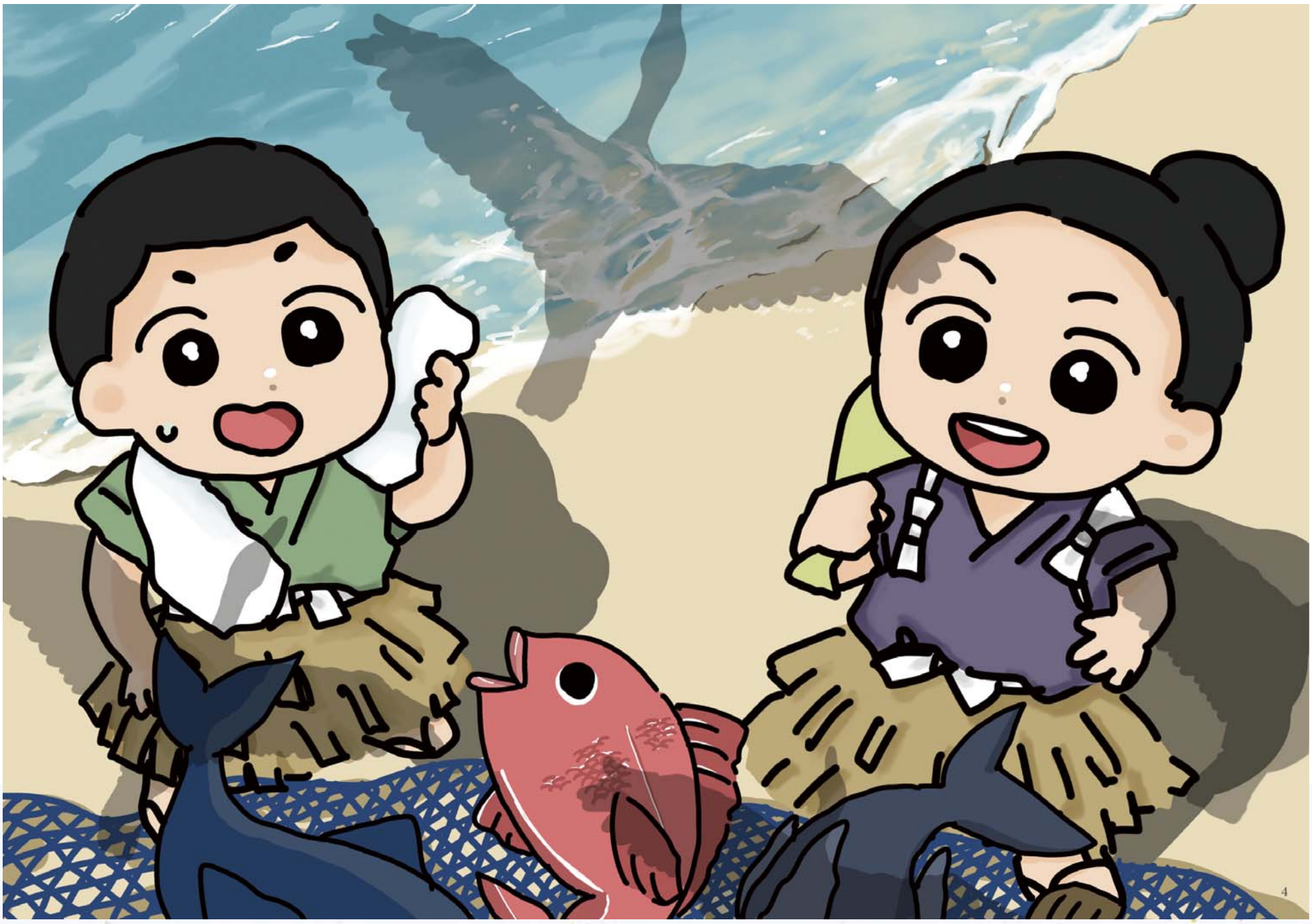
作／鵜家　弘子　　絵／細川　華花

これから神様のお使いの鵜の鳥「鵜様のおはなし」をします。

昔々その昔、七尾湾の近くの村人は漁（りょう）をして暮らしていました。
寒い冬が来てビュービューと北風が吹き、時雨（しぐれ）れて
海は荒れに荒れていました。
嵐（あらし）をのがれて崖に渡鳥の鵜がたくさんやってきて
崖（がけ）一面、鵜で真っ黒になりました。



鵜の鳥たちは海が雨風（あめかぜ）で荒れても海に潜（もぐ）り、魚を食べたり、泳いだり、飛んだりしてとても楽しそうでした。
漁師さんは「こんなに寒いのに鵜の鳥達は楽しそうだなぁ」と思いました。親鳥は小さな雛（ひな）の鵜に潜（もぐ）ってとってきた魚を食べさせていました。
「かわいいなぁ・なんとかわいいのだろう」
と漁師さんは思いました。



鵜の鳥がやってくると不思議と七尾湾に鰤（ぶり）や鱈（たら）
などの魚が次々とやってくるので、
鵜の鳥がたくさんの魚を連れてきてくれたのだと、
漁師さん達は大喜びでした。

村人達は皆で助け合って鰤や鱈をとり、
刺身（さしみ）にしたり、焼いたりして
「うまいなぁ、あったかいなぁ」
「おいしいのう、ありがたい、ありがたい」
と言ってにっこりしました。そして村人達は
「あの鵜の鳥はきっと神様に違いない」と思いました。

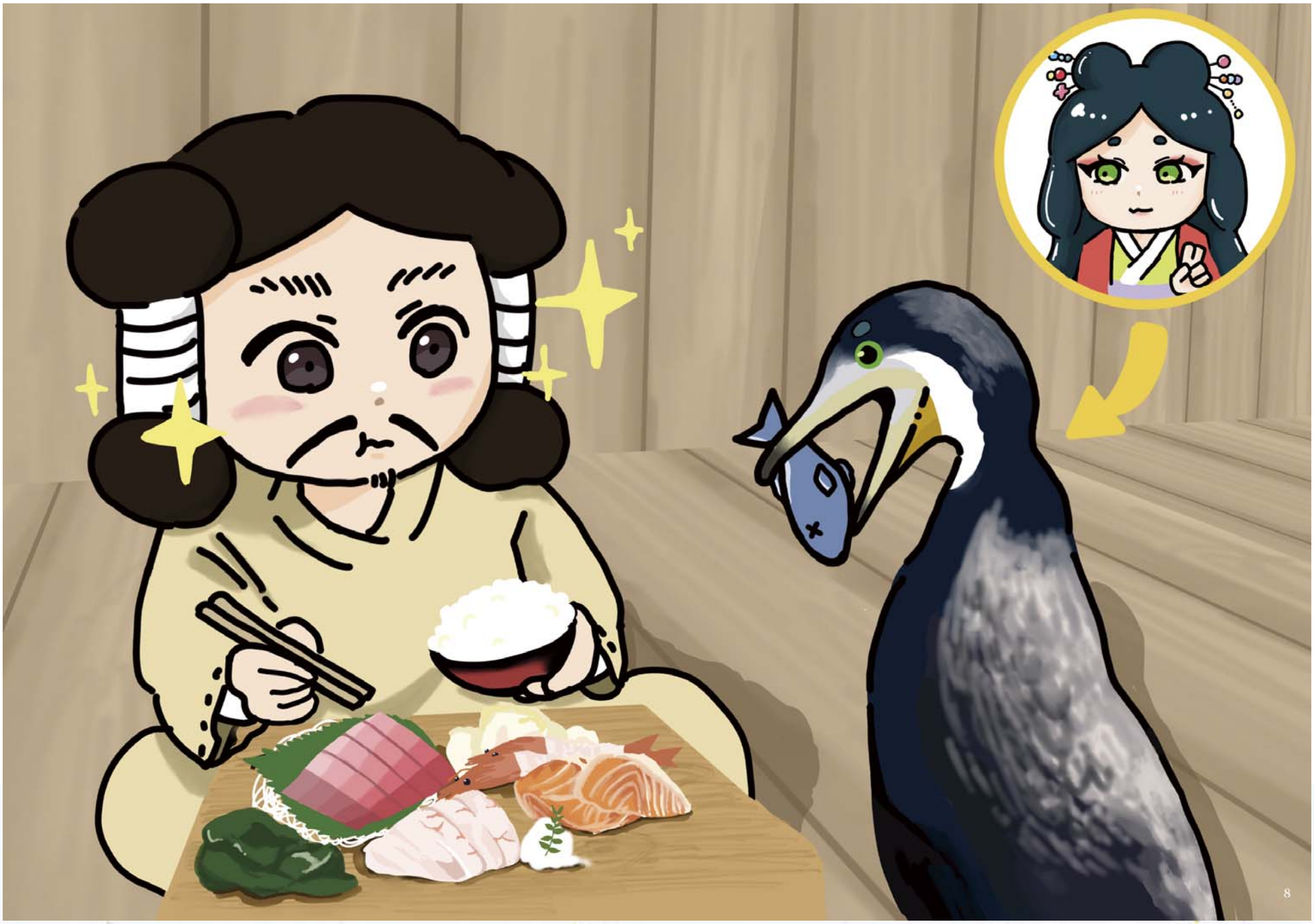
可愛い鵜の鳥たちの話を地元の神様にして差し上げました。

すると地元の神様は

「たくさんの魚が獲れたとはそれは良かった。ありがたいことじゃのう。」

と、大喜びされました。

ある時、大国主命（おおくにぬしのみこと）が出雲（いずも）の国（今の島根県）から帆掛船（ほかけぶね）で日本海をやってこられました。
海が荒れたのか大国主命は大変お疲れの様子でした。村人たちは大国主命（おおくにのみこと）をどのようにおもてなしをしたら良いかとても困（こま）って地元の神様に相談しました。



すると櫛八玉（くしやたま）の神様は鵜の鳥になって海に潜（もぐ）り、海藻や魚を獲ってきて大国主命（おおくにぬしみこと）をおもてなししました。大国主命はたいそう喜び
「美味しい・美味しい」と食べて元気になられました。

大国主命が羽咋にとどまられてからは七尾湾にやってくる鵜が鵜様となり、鵜捕部によって氣多大社まで運ばれることになりました。これを「鵜様道中」(うさまどうちゅう) と言います。

「うっとりベー・うっとりベー」

三人の鵜捕部さんが鵜かごを担いで歩いていると、ぽたぽたと大粒のボタン雪が降り出しました。「寒いのう」と、息ではぁーはぁーと手を温め、「鵜様　どうですか、寒いですか」と、籠の中の鵜様の様子を伺いながら歩かれました。

「うっとりベー・うっとりベー」

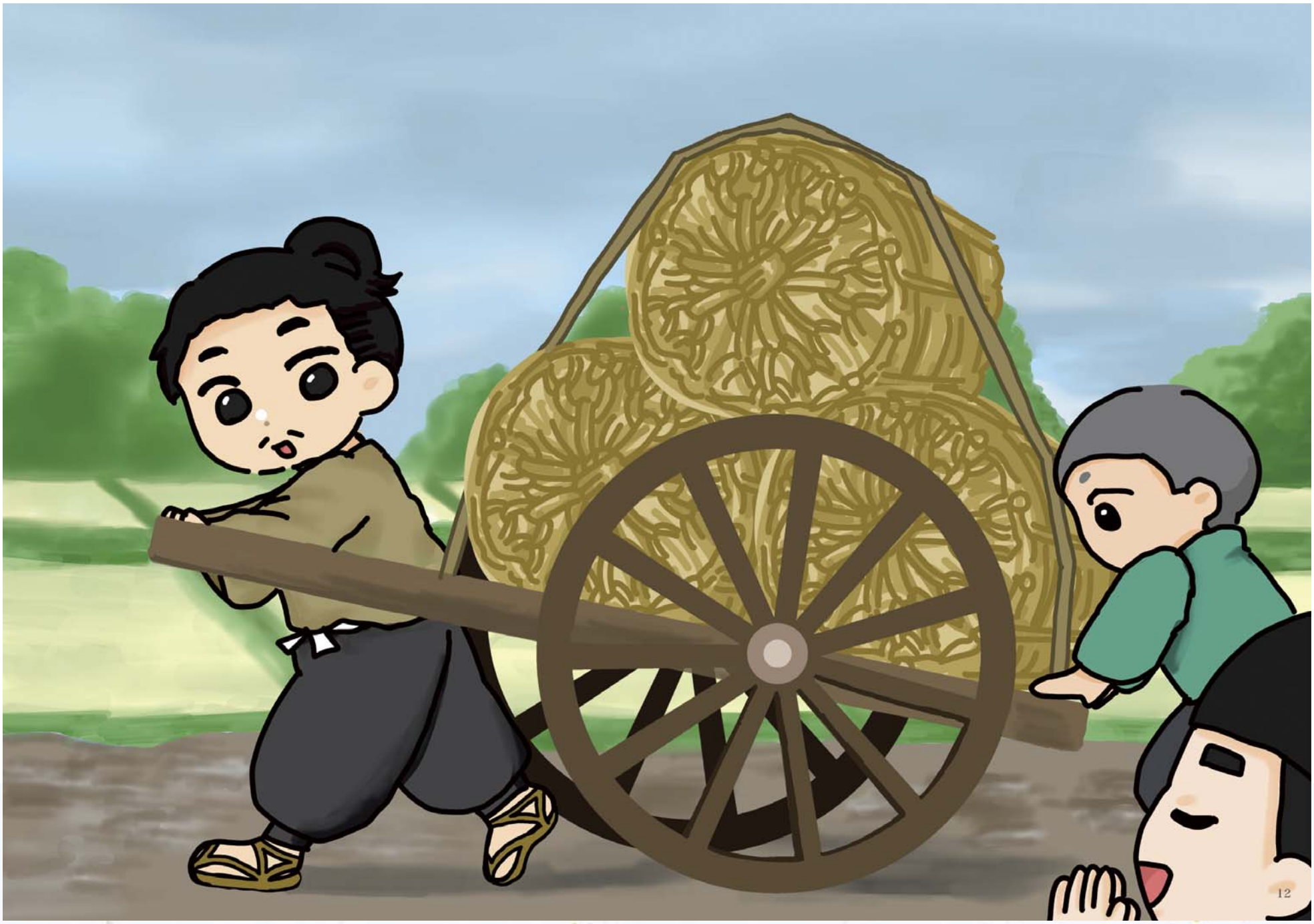
途中、七尾の本宮神社（ほんぐうじんじゃ）では新嘗祭（にいなめさい）が行われました。
次の良川の白比古（しらひこ）神社には大国主命の息子神様が祀（まつ）られているので、鵜様と鵜捕部さんはゆっくりされました。

村人たちは「おお、鵜様じゃ　鵜様じゃ。鵜様がこらっしゃった。」
と大喜びし、次々鵜様を拝（おが）みに集まってきて
「鵜様、今年はお米がたくさん採れました。ありがとうございます。
来年も皆が無事に過ごせますように」
と祈りと感謝を捧（ささげ）げました。

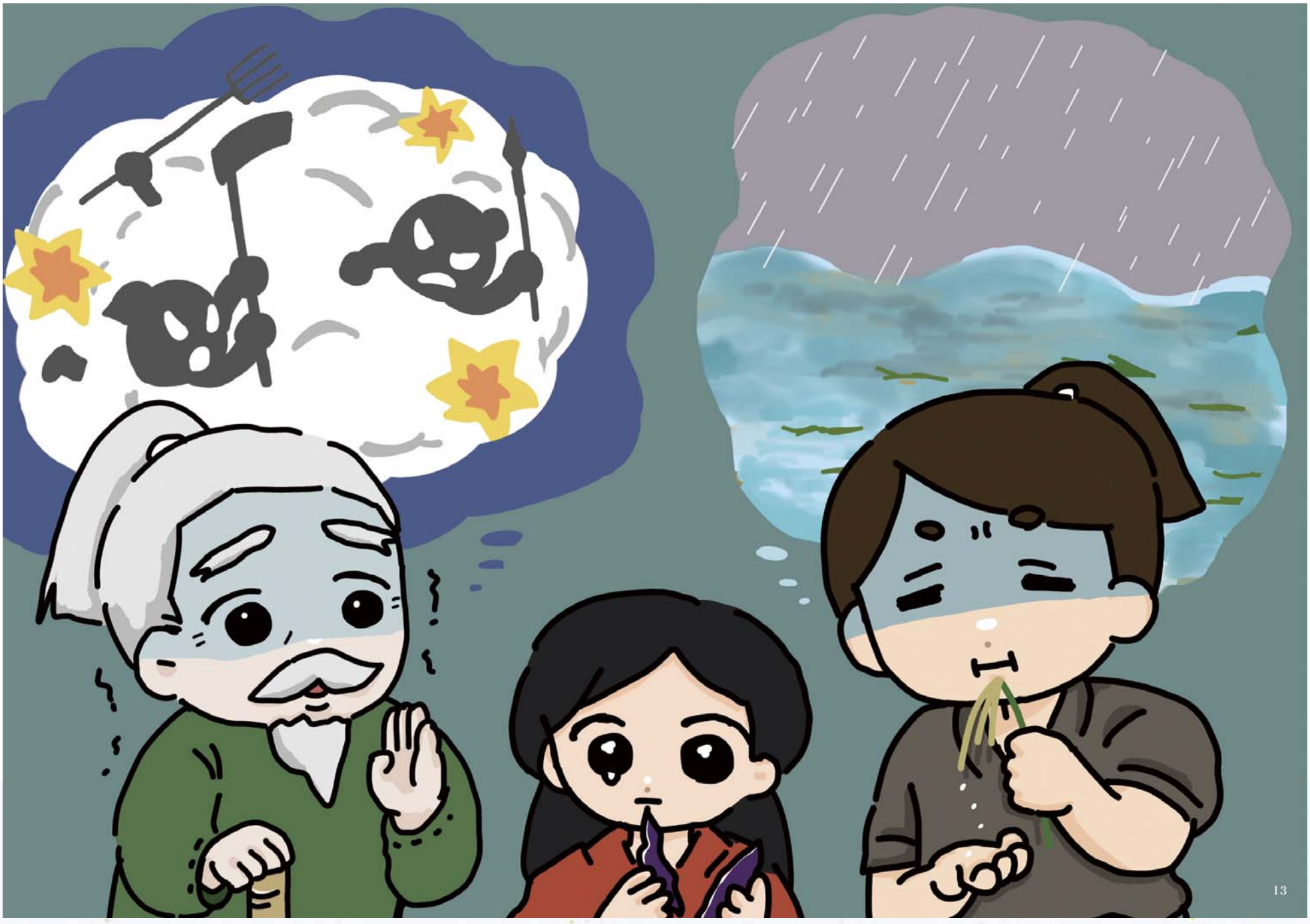
良川の鵜様の宿では、鵜捕部さん達は「おお寒かった。ここは温かいのう。温かいのが一番じゃ。何よりだ。ありがたい・ありがたい。」と囲炉裏（いろり）の火で体を温められました。鵜様は神様なので、特別大切にされ新の藁（わら）の寝床で一休みされ、

「鵜様、温かいですか。ピンピン跳（は）ねる生きのいい寒鮒（かんぶな）ですよ。さあお召し上がりくださいませ。どうぞ、どうぞ。」

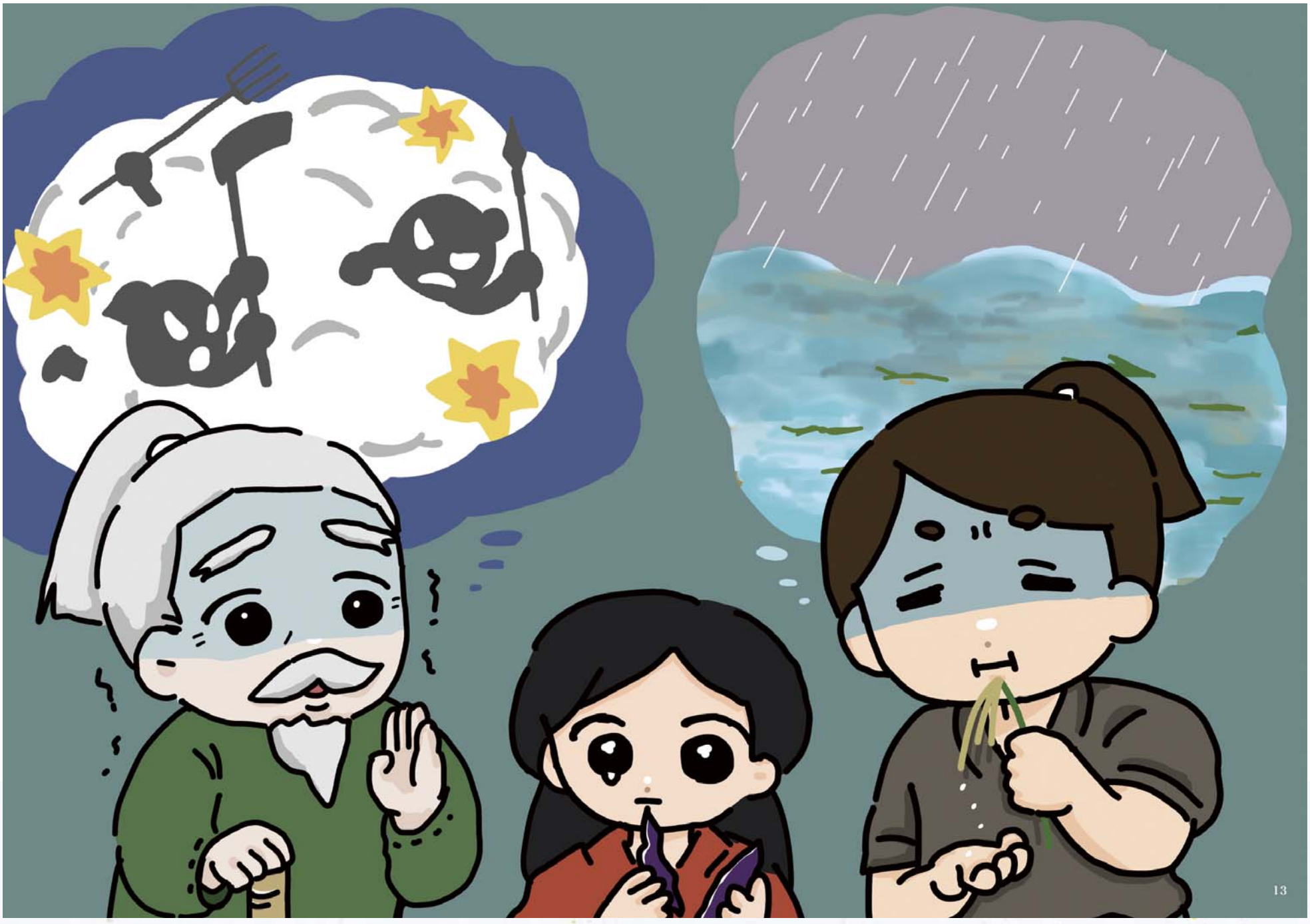
と邑知潟（おおちがた）の寒鮒を差し上げると、
鵜様は元気良くパクパクと数匹召し上がりました。
良川の鵜様の宿でも村人たちが鵜様を拝みに
次々やって来て、鵜様に
「今年はお米がたくさん採れました。ありがとうございます。来年もよろしくお願いします。」　と祈りを捧げました。



昔の神様への賽銭（さいせん）は、お米が採れたお礼にお米を捧（ささげ）げました。村人たちが鵜様にお礼のお米を持って次々とやつてくるので、お米はたくさん集まりました。鵜捕部さん達が重くって運べないので、村人が俵（たわら）に入れて
「今年はようけお米が採れて良かった。氣多の大神様もお喜びになるじゃろう」
と言って、大八車（だいはちくるま）で氣多大社まで運（はこ）びました。



だけど戦争や疫病（えきびょう）、旱魃（かんばつ）や洪水の年もあり、お米が採れず、芋（いも）しか食べ物がない年もあり、おなかが空（す）いて、とてもひもじい思いをしました。
それで村人は一年に一度、鵜様に会えるのを待ちに待っていました。



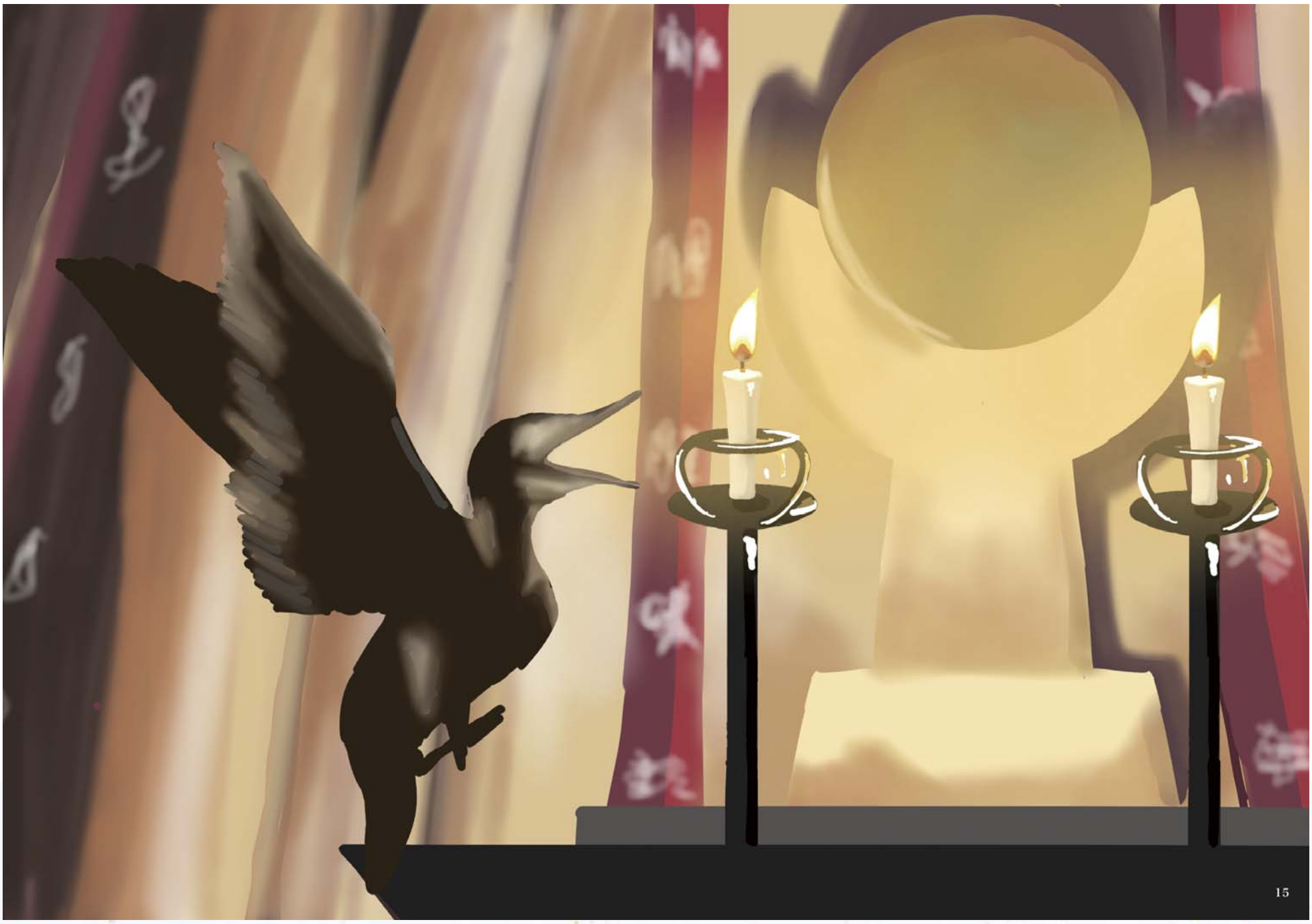
鵜様を心の支えにして、朝早くから日が落ちるまで頑張って
田んぼや畑で　働き詰（づ）めだったので
「鵜様を拝（おが）まんことには新年は迎えられん」
と言って鵜様が通られるのを待ち望んでいました。

翌朝（よくあさ）、鵜様を担（かつ）がれた鵜捕部さんは能登部・金丸・千路を通って氣多大社へ向かわれます。

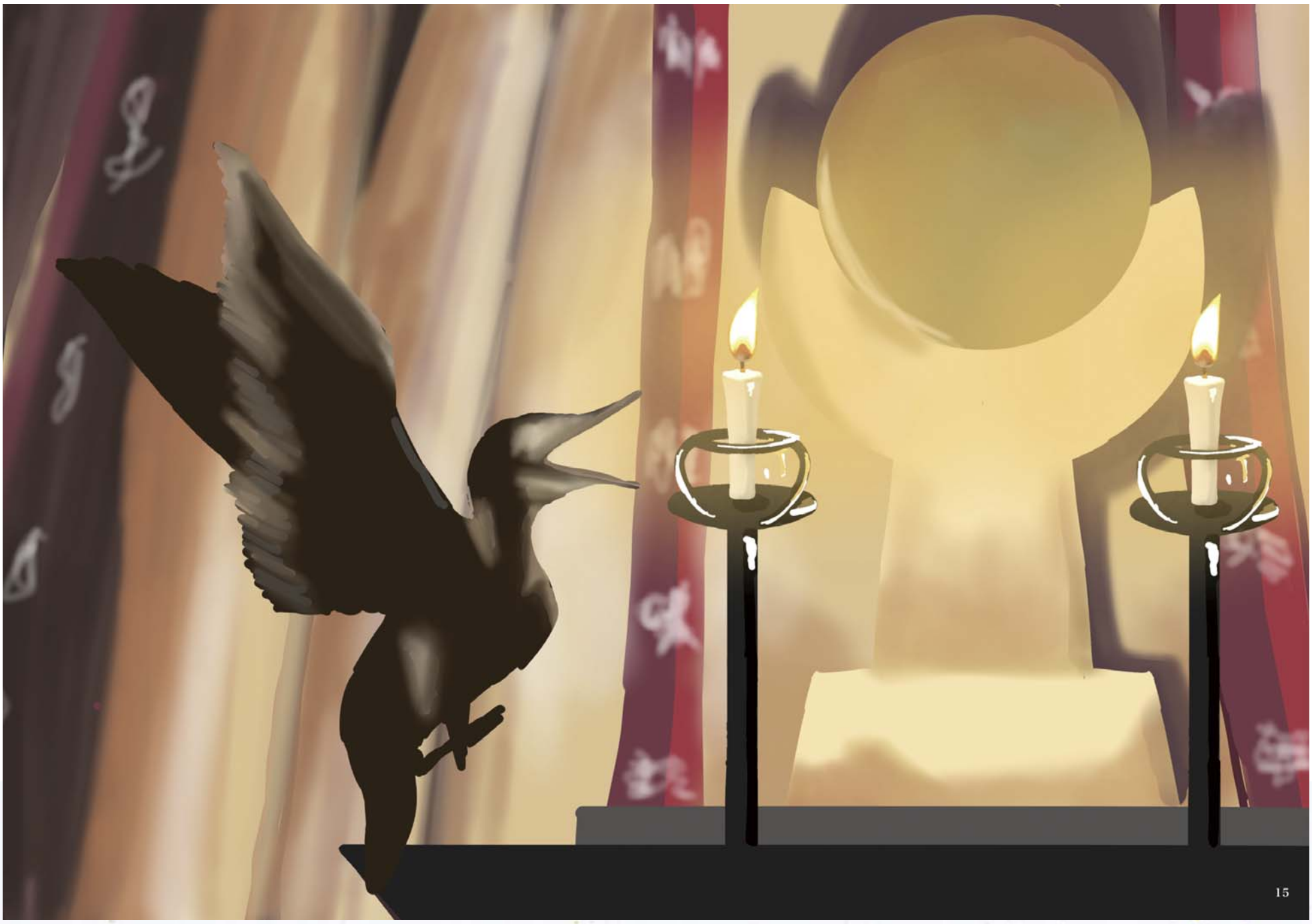
「うっとりべー・うっとりべー」

金丸では鵜様を清められ、昼ごはんを食べられます。そして夕方日が沈（しず）む頃、氣多大社に到着（とうちゃく）となり、

氣多大社の宮司さんは
「鵜様、道中はいかがだったでしょうか。お疲れ様でした。」
と無事の到着を大喜びされました。鵜捕部さんも籠の中の鵜様を見て「おお、元気じゃ、元気じゃ」
と、ひと安心されました。
鵜様は「くお～っ」と、ひと鳴きされました。



氣多大社では朝、まだ暗い時間に「鵜祭（うまつり）」があります。
宮司さんは祝詞（のりと）を唱（となえ）えられてから鵜捕部さんに
「今年の鵜様は元気が良いか」と尋ねられてから、籠（かご）から
放（はな）たれます。鵜様は
「今年はお米がたくさん採れて、皆、大喜びでしたよ」
と大神様に報告され、



沿道の村人達の感謝と祈りも大神様に届けられます。
すると大神様は「それは良かったのう。民が喜ぶのは一番じゃ。」
と、たいそう喜び安心されました。また
「鵜捕部さん、道中　長旅（ながたび）で大変だったことでしょう」
と言って、二泊三日の旅を労（いと）われました。

宮司さん達は鵜祭が終わると
「鵜様、大役（たいやく）でしたね。ありがとう、ありがとう。」
と言って、愛（いと）おしそうに鵜様を抱（だ）っこして海まで
連れて行き
「元気でなぁ・・・」と鵜様を放たれました。
鵜様は元気良く空へ舞い上がり、飛んでいかれました。

羽咋の海にはチラチラと雪が舞い降りていました。鵜捕部さん達は
「鵜様は元気に飛んでいかれたのう。
どこへ飛んで行かれたかのう・・・」
といつまでもまだ明けない暗い空を眺（なが）めていました。
皆で今年一年を振り返り、ワイワイと話をしながら新米をいただいていると、新年への明るい希望が湧（わ）いてくるのでした。

元気の「気」、気持ちの「気」、天気の「気」や病気の「気」などの「気」は、もとは「氣」で、ご飯を炊（た）く時おかまの蓋（ふた）の隙間（すきま）からシューシューと吹き出す湯気（ゆげ）のことで、エネルギーと言われています。元気も勇気もエネルギーだね。

「うっとりべー・うつとりべー」おしまい。